



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

II

國家圖書館出版社

六月四日

六月三日

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

II

第一一冊目錄

昭和三年（一九二八）旅行日誌（第二十五期生）

大西槐三	第四卷第一編		一
大石義夫	第四卷第二編		四三
酒家重好	第四卷第三編		八三
石田博	第四卷第四編		一二一
上西園操	第五卷第一編		一六三
福井直	第五卷第二編		二二七
牧山勲	第五卷第三編		二八一
中村一雄	第六卷第一編		三四七
大坪英雄	第六卷第二編		三八五
門馬訂一郎	第六卷第三編		四二五
佐藤敏夫	第六卷第四編		四九七
村上剛	第六卷第五編		五五五

昭和參年度

旅行日誌

連奉濱駐在班

二十五期生

大西槐三

第 四 卷

調 査 旅 行 日 誌

一

五月二十日。晴。午後曇。

秋黎明に起きて旅装にとりかゝる。

と時事を覚。

五月二十日の涙ぐましい友情の握手、爆竹と院歌に送られて校門を
出る。自動車はあがく、緑の世界を走る。上海の町々、三ヶ月の
別れをおし、船が帆したのは久しぶりであつた。汽船は大連汽船
の大連丸。満洲は広い三日月の旅行であるとは、書院生活の貧
乏対照表であり、国家的使命を帯びたる支那内地巡禮の途は
つらふと思ふ。魂は白銀の如く、成心散る。熔岩の如く、熱情と
旅は遠く遙々である。行雲野鶴、日暮水辺、道遠の哀しみもある
だらう。傷つた苦悶の体験と、悲愴な靈肉の戦い、対する
殉情的精神は固く覚悟となる。

我等四人の若々旅人が青春を賭し、とも勇気限り、大陸の荒

厚に彷徨し踏査し摸索せんとする。試みは、友邦、中國と母國とを
結び付ける最も切實にして、女當なる樸とふみであらう。

出航の瞬間の嚴肅とは、未だ身をしみて忘るべし。船中は文字
通り、通員であつた。会社の方から通知がなつたところ、理申で船室も
充分であつた。書院旅行隊四〇人を入るには、余り狭いものであつた。
露西亞人は一室を占領して、而も奴等は横臥さへし、この様だ。船
のボーイが、各通員が主たる命じようが、どふり付け、柵が大盤石の
如く動さうともあつた。勿論彼の四斗樽程もあり、威大、腰を
おろしては一寸とし、挺佐などは、動かぬのも無理はないと思はれた。
支那人は、露西亞人より、唐の女は喧嘩が強い様である。
此の奥は日本の女は、全く反対の様と思はれる。彼等が主たるものも、
我張り通したものは、威心し多。でもまあ、どうするか、腰を後付け
するものも、来たのは不幸中、幸ひであつた。黄氏が迫る、これ、礼が

始まる。歌が出る。ハーモニカが鳴る。かんして大旅行のカーセは明けぬ。
五月三日。晴。朝の内務課に。

七時朝食。甲板に登れば朝日は照り輝き、海銀の如し。九時
頃より濃霧が、くしく数分おき警笛鳴る。予定より三時をもお
くれ、また島に着。三時目ので別れた大目針しといふ程の成心お
も起らず。幸町。松崎西先輩のお迎へを待ち、青島新聞社に到
る。十六期の久慈寛一氏と面會す。物の三十分もも書院に注
入を促させ、そのより自動車に乗せられて市内見物す。時局柄
その頃の青島の町は帝國の兵隊が達するべく賑わひがあつた。青島
神社を記念撮影す。此の処より碼頭までの途中も唐の女の犬を
しく。而も生憎交番の前をしく逃げ出す欲もあらず久慈さんとは
車より下り、水で何んとかお水でぬぐふた柄があつた。確かはお気の毒
であつた。

五時青島出帆。濟南の戦ひは大僧名を馳せ某中尉殿の
見送り青島の碼頭をせうめん人々であつた。や学校。女中
学校を小は一般市民の見送り壯觀を呈してゐた。不傷を小は兵
隊も乗船す小は種々戦功物語等を聞かす小は愉快であつた。
一等船客は支那の神田正雄代議士も見へら小は稻川が交談し
てその結果夜九時十時を講演ありた小は職業板をたが
聞かんとする出兵問題とのふは是を付するは言を外らして語ら
ず。

六月一日。晴。

午後一時半頃大連着。多数の先輩の出迎を受ける。大連の町も
別子目新しいと云ふ感想は起らなかつた。避難民まで旅館と云ふ
旅館は満員との先輩のや注意で海客協会を落付く。一行と
別して自分等は姉の家に行く。一々振りの面會が別子と

ふと変つたる件も無い様であつた。子供等は大変知れこむもつ小
廻りの。今くの好む叔父を掌握しに。

六月二日 晴。

六時起床す。昨午の夏休中は毎日十時頃まで朝寝坊をして
よく笑はれゐたが今朝は又又対の意味は笑はれりおどする。
一行と苦み兄の日本綿花文庫を参りて参り資料の書物等を借りる。
商工會議所の篠崎書記長に紹介状を貰ふ行へ見る。此の人は
生憎不存であつたが十本木と云ふ御仁ありて大変親切な満蒙の
現況等を付々お話しがあつた。而し自分の調査には要ふ何某の
参り資料も見えぬが出来あつた。此の処で中日協会は行く
次からくへの書院調査班の来訪が大分目を廻してゐらしい。此処
でも通るふる調査材料も甚しい様があつた。電氣會社へ行くとが
得策と思ふ。南満州電氣會社へ行く。生憎多門氏は父君

の予病氣は歸郷を以てはあつたが尾野先輩の函會が出来た。
尾野氏は入社當時は會社の内各事子付とは白紙で
そつと退社時刻でありました故明日を約してお別れして歸る。
一行と共々兄の家まで夕食を招待を以た。その夜朝鮮銀行の
新田氏を訪ねてビールの御意を以て受ける。同氏は孫人であり
話とも合ふを知らずするを遇す。上海の氣候よりは三月もあ
くはる梅ふゆおす。

六月三日。晴。

六時起床す。予室外にはあつたが満州へ来る旅順見物をせぬ
のも夏を以て此の日は旅順見物をあきらめる。一行と共々八時
三十分大連驛着。毎々思ふに彼はあつた彼のを伴一の埠頭を
有る大連までは此の大連驛は余りよみすばらしい梅の思はれ
る。前社長は新造の陵墓もおもしろい。山本社長は

總てが緊縮政策とうい大連驛の新築も當分は實現を求めざる
話である。

九時半旅順着。馬車を馳りて旅順の學府工大を訪問す。一行各々
知人があつてさうく面白かつた。丁度中華學校の庭球の試合が催され
おたが驚きあつた。女學生が聲援し合はれたのは交際
を技が小。植民地がさうく總ての方面に發展してゐるらしい。

一月と共に戦跡見物にあつたが吾人の先人が血肉を以て
して此の旅順を占むが馬車を馳り而も面白かつた。小を見物
すると云々はは。あつた堪へる小ない。柳が氣がして仁がたつた。

丁度自今が午の父が乃木將軍の部として轉戦し多その
あつたを連想してその足の跡が残る。柳が氣がする文配を以ては
尙更馬車も氣がする。小を見物するはまつた。柳が氣
がした。旅順も二三日の見物であり。自今が内役の柳が

多きふく白玉山。二〇三。寺をも登る見ふを憎。今日は濃霧の厚め旅順全果を俯瞰するよりは出来あつたのは残念であつた。夕食は工大の人々と共にして快談はけを過ぎた。別小は陰し青霞の夜歌を残しとおい多が大変感への梅であつた。今日は恒家が大量のるるうしう多。車中より深い眠りに入るのちから。

六月四日。晴。

旅順見物の源水で七時半すぎに眠ってしまった。昨日は久し振りに歩き廻つた多き足の節が痛む。この後で足の痛む梅は陸行の多い旅行はとまると不安と思ふ。九時すぎ足の紹介を貰つて南満洲電気會社の庶務課長の末細胖氏を訪ふ。此の方は書院五期生である。此の方より水と水係の方は紹介を水と調査す。午後大石といひ市内見學す。大連市は大廣い。

場を人跡とてこれに續く山縣通りのメインストリートは上海の南京路の賑はしきはせいけんけんでも何処なく落付くのある主派の町である。何処の町へ行ても日本人が次山見へるものと悔る處も此は何れか内地へ歸つて来た所である。其の後は是非大連にへ就職しないものがある。あといふ所へも起る来た。此の日地調査所へも見学した。大分は機械等の模型でわきまといふ。か煙草の成るがある。別は感心する程のものもある。これも十八九歳の美しい別嬪さんばかり内子と小娘がやめもの。厭々である。此の如き大連市中は中學は教鞭をとるものも少い。藤垣氏を訪ふ。大連にこぼしてゐる。此の夜十時他の班の女衆と大連驛まで見送る。風吹くをやつた小娘が少い。おびきやうに思懐の大まきには遠くはかた。

張作霖氏遇害の騒外がでた。さう実だといふ人もあつた。虚

報 いと云ふ人も有る。噂 うわさと云ふその無^レ正^レの大^ニは知^ルるから

来。早く奉天より見たい。柳文がして仕方の事か。

六月十五日晴

七時半起米。大陸の夏の朝はこれほどぬまかくてい処がある。満鐵の調査課は行く先輩車 高橋之の紹介による。

別日之儀と云ふて電氣事情の調査なり、梅が、あつた、に、い

一つあつたけしに書院の図書館へは送るあると云ふ事だ

字を歸る氣をなすか否。滿鐵の社員は、以て月給を

取ておとこは前も用ひ多かあるその又実を今は

妙々目之明に見せつけら小梅あまのする山本社長之首

を
や
と
云
ふ
の
道
理
は
知
ら
ん
と
思
ふ
失
も
有
つ
ゑ
お
し
慮
を
力

課業と来多日ヲは甚し梅ある馬鹿計しをしゝゝ人もの小

は民
眼を
あふ
人も
あふ
ても
高橋
まへ
人は
こつ
と
何
をも

